

きいのではないか、と思うことがある。

私のある友人は、ものを差し出そうとした時、それを受け取る人から「私が幸せになる以上に、あなたはもつと幸せですね」と言われてハッと気づいたという。

国際支援で（あるいは他人に何かをしてあげて）相手の喜ぶ姿を見て、「良いことをした！」という満足感に浸る。幸福感と言ってもよいが、このような気持ちを味わえることは本当に素晴らしいことと思う。自分にとつては何よりも至福の時。そして何よりも良い「生（あるいは生きがい）」を与えられたことにもなる。

ノーブレス・オブリージュ (noblesse oblige) という言葉がある。「身分の高い人は、それに伴う義務として他人に寛大で立派に振る舞うべき」という意味である。私はそんな身分や義務感に関係なく、一人の人間として、ただじつとしていられないという自然な気持ちで他人に何かをしてあげたいのである。もしこれが相手の喜びとなり、さらにそれが二倍にも三倍にもなって自分に戻ってくるのであれば、これ以上の喜びはない。

要は、相手に「与えることのできる立場」にあることの喜びを十分にかみしめることから始めたいと思う。それだけに私は、相手にものを提供する時、「ものを与える」のではなく、「ものをもらっていたたく」という謙虚な気持ちが大切と、いつも自分に言い聞かせている。

国際支援で相手を助けるということの意味

札幌北 小林 博

国際支援はもともと相手のために始めるのだから、相手が喜んでくれればそれでいいのである。ところがその喜びは、実は援助を受ける人より、援助を与える人の方がもつと大